キルギス・ウール協会ビジネスプレゼンテーション

はじめに

10月初旬、ROTOBOは経済産業省補助事業「中央アジア地域等投資環境整備・ビジネス振興事業」の枠組みにて、キルギスより同国ウール協会（National Association «Kyrgyz Wool»）の企業グループを招聘し、日本企業とのビジネスマッチングを目的とした一連のプログラムをアレンジした。その一環として、当会は10月３日（金）に都内で「キルギス・ウール協会ビジネスプレゼンテーション」を開催し、代表団筆頭のウール協会会長を含む４名がキルギス産ウール製品を日本企業関係者にアピールした。本稿では、登壇した４名の報告者のプレゼン概要を紹介する。

プレゼンテーション

（1）A.カセノフ　キルギス・ウール協会　会長

キルギス・ウール協会（以下、当協会）は2022年に設立された非営利団体であり、350以上の国内羊農家および70以上の企業・協力機関が加盟している。当協会はウール製品の消費市場開拓、国内のウール生産・加工体制の底上げ、原料輸出依存（特に中国向け原料輸出への偏重）から高付加価値製品の生産・輸出への転換等をミッションとして掲げている。

そして現在、当協会が注力している分野がメリノウールの増産である。国土の93％が山岳地帯で占められるキルギスの地理的条件、並びに環境に配慮した持続可能な土地利用を勘案すると、国内で放牧可能な羊の最大頭数は700万頭であると言われている。当協会としては、かかる事情を考慮した上で、現在20万頭のメリノ種を2038年までに羊総数の半分にあたる350万頭、メリノウールの生産量を700ｔから１万7,500ｔに増加させることを目標に据えている。

また国産メリノウールの世界市場進出戦略の一環として、キルギスでは独自のメリノウールブランドである「キルギス・マウンテンメリノウール（Kyrgyz Mountain Merino Wool）」、略称「キリノ（KYRINO）」が開発された。キリノとは、キルギス在来種「ジャイダラ（Jaydara）」とメリノとの交配種であるキルギス・マウンテンメリノ羊から採取される羊毛を指し、キルギス山岳部の高標高かつ過酷な気候条件下で育まれるキリノには、優れた調温・調湿機能が備わっている。キリノの繊維の太さは19～23ミクロンとなっている。2022年には日本や欧州において品質証明書を取得した。

我々はキリノの生産工程で、遺伝子組み換えやミュールシング（羊の体にウジ虫が寄生しないよう皮膚や肉体の一部を切除する施術）、化学薬品の投与を一切行っていないほか、過放牧の防止や生物多様性の保全といった環境面にも特段の注意を払っている。かかる取り組みを通じ、キリノをオーストラリア産やニュージーランド産のメリノウールに比肩するブランドに育てたい。右実現には、日本の経験や技術を

フロアからの質問に答える
カセノフ・ウール協会会長

キルギス・ウール協会ビジネスプレゼンテーション　プログラム

時間	プログラム
14:30-14:35	◆モデレーター開会挨拶及び趣旨説明　（一社）ROTOBO
14:35-15:15	◆プレゼンテーション ① アイメン・カセノフ　キルギス・ウール協会　会長 ② チナラ・マカショワ　有限責任会社 Tumar Art Group　社長 ③ アンナ・チョ　有限責任会社 Aliya　デザイナー・コンサルタント ④ ベルメト・トゥルスナクノワ　ファッション繊維協会　専務理事
15:15-15:30	◆質疑応答
15:30-16:30	◆個別商談

参考・導入することが有効であると考える。

キリノブランドの世界展開にあたり、目下の課題がウール製品の国内製造工場の整備である。そこで当協会は、ソ連崩壊以降放置されてきた羊毛加工工場「カシエット（Kasiet）」の再稼働に係るプロジェクトを政府から受託し、現在同工場の洗毛ラインの整備を行っている。計画が順調に進捗すれば、2026年末にも同工場の再稼働が実現される。また本プロジェクトと並行して、ウールの一次加工工場の新設計画も進んでいる。

キリノブランド推進の取り組みを通じ、海外市場におけるキルギス産ウールの知名度向上だけでなく、環境保全や世界の持続可能な発展にも貢献したいと考えている。

(2) Ch.マカショワ　Tumar Art Group　社長

Tumarは1999年設立の羊毛フェルト生地・製品メーカーである。現在180名以上の従業員を擁し、うち65%が女性従業員となっている。また国内地方部に住む60名の工芸職人がプロジェクトベースで当社事業に関わっている。当社は次の３つのミッション、すなわち①キルギスの伝統的技法・装飾とモダンデザインとの融合、②環境に優しく安全なフェルト製品の生産、③持続可能な生産及び新しい伝統の推進を掲げている。当社は国内に４つの製造工場および９つの工房を所有する。当社製品の72%が海外市場に輸出され、主な輸出先は米国、カナダ、ドイツ、フィンランド、ロシア、カザフスタンとなっている。

当社として力を入れている製品がフェルトシューズである。フェルトシューズはウールの特性、すなわち調温・調湿性、抗菌性、快適な肌触り感等を最も実感できる製品と我々は捉えており、これを当社の主力輸出品に育てていきたいと考えている。

シューズの製法に関し、我々は２つの方法を採用している。１つ目はフェルト製品の伝統的な製法である一体成型式、２つ目がフェルトシートを縫い合わせて成型する縫合製法である

Tumar 社のウール製品例

本稿は『ロシアNIS調査月報』2025年11月25日号にも掲載されています。

が、いずれの製法においてもウェットフェルティング（石鹸水とお湯を使って羊毛をフェルト化させること）の工程が含まれる。

また我々は製造工程における「廃棄物ゼロ」を掲げ、裁断くずや規格外ウールなどを全て断熱材に加工しているほか、生分解性を持つ素材・材料のみを使用するなど、環境面に配慮した取り組みにも注力している。

直近の生産能力及び今後の見通しを次のとおり示す。羊毛フェルト生地については、2024年の生産実績が120ｔで、これを2025年に200ｔ、2027年に400ｔに増産していく。またフェルトシューズの2024年生産実績は８万足だったが、2027年には25万足にまで増産することを目指す。これら以外の当社生産品目では服飾小物・バッグ及びインテリア用品があり、前者の2025年生産見通しが35万点、後者が２万点となっている。

当社の羊毛フェルトは繊維製品の国際安全規格「エコテックス規格100」認証を受けており、３年前の取得から今日まで認証資格を毎年更新し続けている。質への要求水準が高い日本市場でも当社製品は競争力を発揮できると確信しており、日本側パートナーを見つけたい。

(3) A.チョ　Aliya　デザイナー・コンサルタント

当社は1995年創業のムートン製品メーカーで、海外市場向けに「Merino Mood」という商標の下で製品の生産・販売を行っている。羊毛の原皮加工から、染色、製品の製造まで一貫生産体制を敷き、衣料品からインテリア用品寝具、ペット用品まで幅広いラインアップを揃えている。自社加工工場では一日あたり400頭の羊皮加工を行うことができ、またクライアント側が希望する設計・デザインでムートン製品を生産することも可能である。カラーバリエーションは約500を数える。

当社製品の大半は輸出向けで、主な輸出先は

Aliya 社のウール製品例

CIS諸国、欧州、米国、カナダとなっている。当社のユニークな製品として、メディカルグレードのムートン製品が挙げられる。キルギスの羊はラノリンの含有量が多く、高いヒーリング効果を期待できることから、当社は車椅子カバーやニーパッドといった医療現場向け製品も製造している。

目下、新規商品開発の一環としてペット用品の開発に力を入れている。ムートンは静電気が起きにくいため、静電気を苦手とする犬や猫が好む素材である。

ムートン製品の製造工程で投入される化学薬品はZschimmer & Schwarz Chemie（ドイツ）、Pulcra Chemicals（同）、Texapel（スペイン）といった、国際的に安全性評価の高いもののみを採用している。

(4) B.トゥルスナクノワ　ファッション繊維協会専務理事

ファッション繊維協会は2022年に設立された比較的新しい組織で、キルギス繊維産業の海外展開支援を主要ミッションとして掲げている。その一環として、繊維産業見本市の主催、

輸出品目の拡大を見据えた新規技術導入支援、政府機関へのロビーイング等に取り組んでいる。見本市に関してはすでに二年連続で開催しており、直近では中国、カザフスタン、ロシア、パキスタン、ウズベキスタン等のバイヤーを招待した。

キルギスの繊維産業の歩みと概況について簡潔に説明する。ソ連崩壊はキルギスの国内経済・産業に甚大な影響を与えたが、繊維産業とて例外ではなく、多くの関連工場が閉鎖に追い込まれた。国内での生産基盤が失われた中、キルギスの繊維産業は、中国やトルコからアパレル製品を輸入しこれをカザフスタンやロシアに転売するという再輸出ビジネスが長らく主流であった。かかる状況では国内繊維産業の発展を望むべくもないのは想像に難くないが、あえてポジティブな側面を見出すのであれば、再輸出ビジネスのおかげで、キルギスの繊維関係者らは、輸出先市場のニーズや嗜好に関する理解を深めることができた。

キルギスの繊維産業が再輸出型から国内製造・輸出型にシフトし始めたのは2014年頃と言える。キルギスのユーラシア経済連合（EAEU）加盟や周辺地域の経済的・地政学的変動等を背景として、国内に大・中規模の繊維工場が設立されはじめた。公式統計によれば、今日国内の繊維産業における労働者数は約15万人とされている。繊維関連輸出は現状１億ドル程度であり（もっとも、公式統計に表れない密輸出分を含めれば輸出額は数倍に膨れ上がるとの推計もある）、本年中に1.5億ドルまで到達させることを目標としている。繊維品の95％は輸出に供され、うち70～80％がロシア向け、残りがベラルーシやカザフスタン向けとなっている。なおロシアの軽工業品輸入に占めるキルギス製品の割合を見ると、以前は１～1.5％程度であったが、ウクライナ戦争以降は３～４％に増大した。

現在、キルギスの繊維産業は「量から質への移行」を目標に掲げ、生産体制の再編を行っている。質の高い製品を製造すべく、ウールやコットンの加工基盤を国内に造成したり、ソ連崩壊以降稼働がストップしている工場を復活させるといった取り組みが行われている。キルギスの隣国かつライバルである中国やウズベキスタンは人口規模においてキルギスを凌駕しており、大規模工場に大量の労働力を投入し繊維品を量産するというこれら二国の戦略は我が国には馴染まない。キルギスが目指すべき針路は、小ロット発注でも対応できるコンパクトな生産体制を構築し、かつ質の面で優れた製品を作ることであると思う。

プレゼン後には日本・キルギス企業間の
個別商談会が実施された。

（構成：大内 悠）

本稿は『ロシアNIS調査月報』2025年11月25日号にも掲載されています。